

Glocal Tenri



11

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.26 No.11 November 2025

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
神話に見る創造の試行錯誤
／井上 昭洋 1
- ・ 天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」
(20)
ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相⑨
／加藤 匡人 2
- ・ 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌 (28)
災害復興における宗教団体の支援：日台比較の視点から
／山西 弘朗 3
- ・ 英語文献にみる天理教 (12)
『The Gist of Japan』(2)
／尾上 貴行 4
- ・ イスラームから見た世界 (最終回)
イスラームと世界、そして日本のこれから
／澤井 真 5
- ・ 日本占領期の香港—植民地研究の視点から— (6)
日本による植民地統治の手段としての「同化」教育
／山本 和行 6
- ・ 2025 年度公開教学講座：「元の理」の学術的研究とその新しい展開を求めて (5)
第 5 講：「元の理」と福祉思想
／八木 三郎 7
- ・ おやさと研究所ニュース 8
第 23 回国際宗教学宗教史学会 (IAHR) 世界大会で発表／写真展「天理大学 100 年」(第 2 期)を開催／第 380 回研究報告会 (9 月 30 日)

巻頭言

神話に見る創造の試行錯誤

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

ハワイの創世神話では、大地の女神パパと天空の男神ワーケアが交わり、最初にハワイ島やマウイ島などが誕生する。その後、互いに浮気をして、オアフ島などが誕生するが、よりを戻した二人の間にカウアイ島やニイハウ島などが誕生した。さらに、パパとワーケアの間にはホオホークー・カラニという名の娘も生まれた。成長した娘の美しさに心を奪われたワーケアは娘と交わり、ハーロア・ナ・カラウ・カパリリという名の男の子を身ごもらせるが、流産してしまう。その亡骸を土に埋めると、そこからハワイ人の主食となるタロイモが芽吹いた。次に二人の間に生まれた元気な男の子は、タロイモになった長男の名にちなんでハーロアと名付けられた。このハーロアが最初の人間であり、彼の子孫が現在のハワイ人であるとされる。

このハワイの神話は、原初の神・巨人・人間などの死体から山河や作物などが生まれたとする死体化生神話に分類できる。特に作物の起源を説明するタイプは、インドネシアの伝承にちなんでハインウエレ型神話と呼ばれる。この神話もその一例であるが、ここで注目したいのは、神の人間創造の試みが初めは失敗に終わったという点である。このように「神々が試行錯誤しながら人間を創造した」と物語る神話は世界各地に見られる。

まず思い当たるのは、厳密には人間創造の神話ではないものの、『古事記』のイザナギとイザナミの国産み神話だろう。二神はオノゴロ島に立てた天之御柱の周りを回って交わるようになったが、最初の交わりでイザナミの方から先に声をかけたため、骨のない蛭子が生まれた。彼らは蛭子を葦の舟に乗せて流し、次に生まれた淡島も子の数に含めなかった。いずれも不完全な子であったのだ。その後、天上の神々に伺いを立て、作法通りにイザナギから声をかけると、淡路島や四国など 8 つの島が生まれ、日本列島を生むことに成功した。

マヤの創世神話である『ポポル・ヴフ』でも、神々は三度の試行を経て人間創造に成功する。最初の試みでは、神々は泥で人間を作ったが、崩れやすく水に溶けてしまったため、失敗に終わった。次に、木を削って人間を作ったが、彼らは丈夫で数も増えたものの、心を持たず神々を崇めることがなかったため、大洪水によって滅ぼされ、その時の生き残りが猿になったとされる。最後に、神々は黄色いトウモロコシと白いトウモロコシを粉にして練り、知恵と心を持った人間を作ることに成功した。ただし、人間が自分たちと同等の知恵を持つことを恐れた神々は、彼らの知識に制限をかけたという。

試行錯誤しながら人間を創造する様は、神々の人間味を感じさせる。しかし、この錯誤は単なる失敗なのだろうか。成功の前段階、前提条件としての失敗には深い象徴的な意味が込められているのではないか。未成熟なゆえに埋められ、流された最初の子、不完全なために滅んだ存在は、単なる欠陥ではない。ハワイ神話の長男のように作物の誕生を約束する犠牲であったり、『古事記』のように正しい儀礼の必要性を教えるものであったり、マヤ神話のように適切な素材を教える教訓であったりする。一方、試行錯誤のプロセスそのものは、人間が本来的に抱えている不完全性を示唆しているのではないか。また、人間は不完全な存在だからこそ段階的に成熟していく可能性を持っているということも語っているのではないか。

ところで、一神教の絶対神は、多神教の神々とは異なり、人間創造の際に試行錯誤しない。『創世記』では、神は土の塵からアダムを作り、彼のあばら骨からイブを作ったとされるが、創造そのものに試行錯誤の痕跡はない。ただし、その後の二人の樂園追放を神の救済計画の一部とみるのか、あるいは神話学的な観点から人間創造の破綻または失敗の一種と見なすのかは、解釈が分かれるだろう。

ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相⑨

フランスにおける日本語学習の目的

前回(2025年9月号)に続いて、天理日本語学校の学習者数や学習者の年齢層の変化に関わる背景を探っていくが、今回はフランスにおける日本語学習の目的に注目したい。

管見の限りでは、国際交流基金が監修する海外の日本語教育機関に関する資料の中で、日本語学習の目的が体系的な形で初めて出るのは1998年度の調査である。それより前には、1993年度の調査で記述式の解答があったようであるが、各機関が自由に記述できる形式で共通の比較項目がないため、今回は考察の対象から外している。

図1は、フランスの学校教育以外の日本語教育機関における日本語学習の目的の中で、本稿の内容に関わる項目のデータを取り出したものである。それぞれの数字は、各年度の調査アンケートに回答したフランスの学校教育以外の日本語教育機関のうち、該当する項目を選んだ機関数の割合(%)になる。(たとえば、ある項目の数字が50となっている場合、それは調査アンケートに回答した日本語教育機関の5割がその項目を選択したということになる。)

それを踏まえた上で、このデータを見る際に注意しておかないといけない点を三つ述べておきたい。一つ目は、いずれのデータも、調査対象となった日本語教育機関が回答した内容であり、必ずしもそこに通う学生自身が答えた内容ではないという点である。中には、学生に確認をした上で回答している機関もあるかもしれないが、調査データからはその点が判断できない形になっている。二つ目は、年によって学習目的について選択できる数が異なっている点である。たとえば、1998年度から2006年度までの調査では、学習目的は5つまで選択できるようになっているが、2009年度以降はその上限がなくなっている。三つ目は、日本語学習の目的に関する項目が、調査アンケートが実施された年によって少しずつ異なっており、項目によっては設問が大きく変わっているものもあるという点である。

これらの点を踏まえると、このアンケート調査のデータを表に並べてみたとしても、日本語学習の目的の通時的な変化をたどるには適していない。(そういった誤解を避けるため、表には折れ線グラフではなく縦棒グラフを採用している)。そういった制約はあるものの、調査年ごとのデータとしては非常に有益であるため、そこから分かる範囲で考察を加えてみたい。

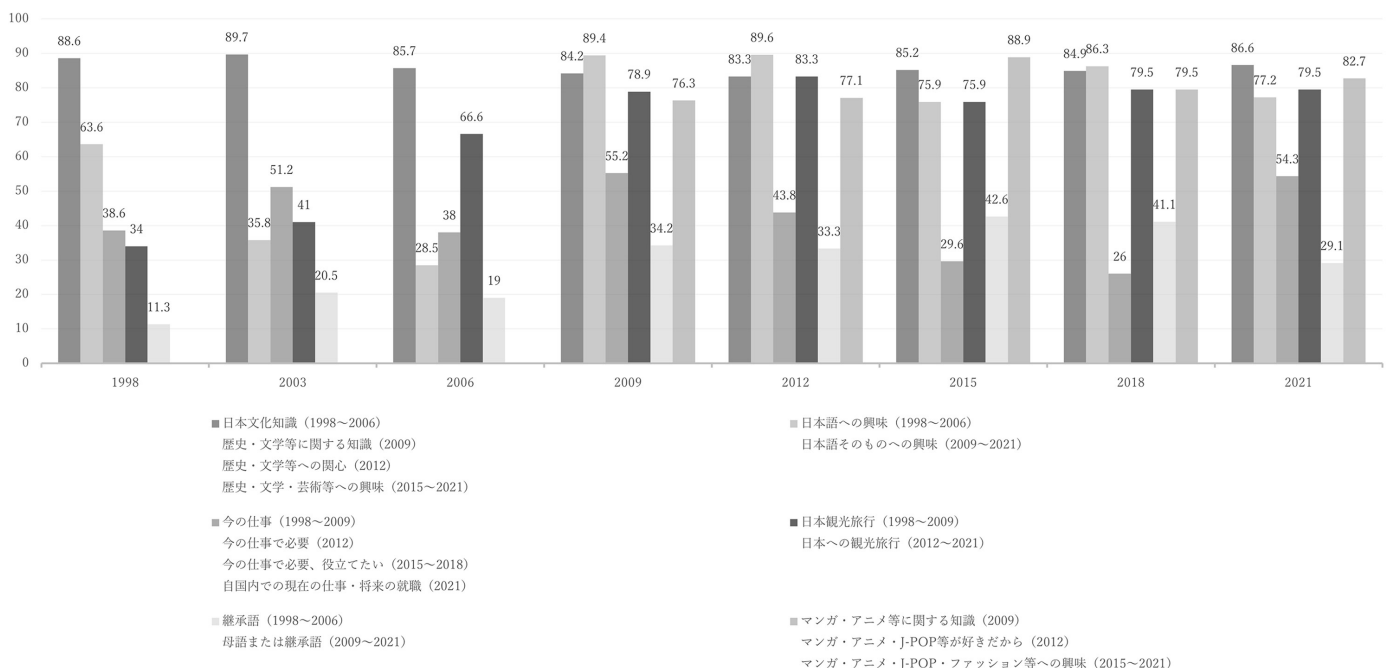


図1. フランスにおける日本語学習の目的(抜粋)(出典:国際交流基金 2005、2008、2011、2013、2017、2020、2023、国際交流基金日本語国際センター 2000。2015年度、2018年度、2021年度の調査については、国際交流基金ホームページ上に掲載の集計表も参照。)

災害復興における宗教団体の支援：日台比較の視点から

災害復興における宗教団体の支援：日本の場合

災害復興における宗教団体の支援のあり方は、それぞれの国や地域における社会と宗教、政府と宗教の関係によって形作られる。たとえば、日本における宗教団体の復興支援について、宗教社会学者の三木英は、1995年の阪神・淡路大震災における宗教による救援活動を取り上げている。彼は、その貢献の大きさに比して宗教団体の活躍ぶりが一般に知られることは少なかった理由として、当初配布される救援物資に教団名が書かれていたり、またボランティアが教団の名前を前面に出していたりしたため被災者の間には抵抗感が生じ、反省からそうした救援活動は自重されるようになったこと、さらに一目で宗教者とわかる服装での活動も控えられたことで、被災者が救援者を宗教関係者と気づかなかった場合も少なくなかったことを指摘する(三木 2015:25)。さらに、「あらゆる宗教団体の活動には人々から敬遠される危険性がつきまとう。信仰の押しつけと解され、人の難儀につけこんで信者を増やそうとしているとの印象を被災者に抱かれる懸念は、大いにある。さらに地域社会と特定の宗教とが関係を持つことに対し、住民側も宗教側も、信教の自由を語る憲法二十条に抵触する惧れを感じて躊躇せざるをえない。あるいは、自教信者以外への宗教団体のアプローチが、他教団から『領海侵犯』の誹りを受ける可能性も、なしとはいえない」と、災害復興における宗教教団による支援の限界を指摘している(同上 2015:36)。その理由として、日本における宗教多元主義と信仰者比率の低下を挙げている(同上 2015:38)。

ところが、2011年の東日本大震災における宗教団体による復興支援については、阪神・淡路大震災とは異なる動きがみられた。阪神・淡路大震災において、基本的に宗教教団はそれぞれが独立的に活動しており、宗派を越えた慰霊の儀式的ほかには協働することが少なかったが、東日本大震災の被災地では宗教者が積極的に宗教・宗派を越えて連携した。このような連携が実現した背景にはフェイス・ブックやツイッターなどのSNSの普及があり、被災者情報や救援活動に関する情報を救援者側が共有することができたことが挙げられる。また、宗教研究者たちが「宗教者災害救援マップ」をフェイス・ブック上に立ち上げ、そこに避難所となっている宗教施設や、救援活動拠点として機能している宗教施設に関する情報を入力して、宗教・宗派間の連携のためのプラットフォームを用意した。さらに、彼らを含む多くの宗教研究者が中心となり、宗教界を挙げた救援活動のための情報交換を行う場として宗教者災害支援連絡会が2011年に設立された。中立的な研究者が媒介となるなら、宗教団体は宗教・宗派の壁を気にせず集まりやすく、その場で得られた情報や意見を各宗教では今後の活動に活用することができる。また宗教者の取り組みについての情報を、広く社会に向けて発信する機会も拡大していった(同上 51～53)。

災害復興における宗教団体の支援：台湾の場合

台湾における災害復興の際の宗教の支援活動については、とくに1999年に台湾中部で発生した921大地震の際に注目された。この時には、避難所の提供、炊き出し、救援物資の提供、医療支援などの緊急支援から仮設住宅の建設、再建段階における学校や寺廟、教会の建設や生活支援、コミュニティの再建まで、各宗教団体によってさまざまな支援活動が展開された。このような社会

情勢を受けて、天理教による台湾伝道庁災區服務隊(災害救援ひのきしん隊)も結成されたのである。復興段階においては、宗教によって救援の仕方に大きな差異が見られた。キリスト教は社会的弱者のエスニック・グループのケアを主に行ったのに対して、仏教は被災地と協力して建物の再建を主に行い、民間の寺廟は慰問や祈りなどを主に行った(林・陳 2004)。このなかで最大規模の支援活動を積極的に行い、社会からの期待を集めたのが仏教系団体の慈済会(財団法人佛教慈濟慈善事業基金会)である。

慈済会の災害支援については、これまで日本においても金子昭や村島健司が研究を積み重ねている。金子によれば、台湾社会において大規模な災害(地震や台風、あるいは飛行機事故のような人災も含む)が起こった際に、民間団体として慈済会だけがフリーパスで救援に向かい活動できる状況がある。これは慈済会が、政府からの信用と市民からの信頼を共に受けている証拠であり、その徹底したボランティアの姿勢が慈済会の教勢をさらに拡大させ、その結果として慈済会はますます社会奉仕を盛んに行い、そのことが同会の信用を一層高めていく、といったプラスの循環が確立しているという(金子 2005:55)。

また、村島は921大地震の際の慈済会の災害支援について、震災発生当初は炊き出しや被災者の心のケアなどの支援が中心であったが、大きな額の義援金が徐々に集まってくると、被災者の要望に応えるかたちで、機能不全に陥り被災者への復興政策を十分に提供できなくなった政府に代わり、仮設住宅や公立学校の再建などの大規模な復興支援活動にも従事するようになっていったことを指摘し、これを、「台湾型災害復興」とであると主張する(村島 2013:264)。

台湾社会における宗教団体の災害支援は、政府からの信用と社会からの信頼に応じて、政府の復興政策では十分に提供できない支援を、政府に代わって提供するもので、宗教団体の名前を掲げて宗教が見える形で活動するという特徴がある。こうした活動は、マスメディアでも大きく取り上げられ、支援内容も炊き出しや救援物資の提供などの緊急支援はもちろん、仮設住宅や学校の再建まで広範囲に及んでいる。

以上の宗教団体による災害支援の先行研究からうかがえるように、災害復興における宗教団体の支援のあり方は、それぞれの国や地域における社会と宗教、政府と宗教の関係によって形作られることが改めて分かるのである。

[参考文献]

- 金子昭(2005)『驚異の仏教ボランティア—台湾の社会参画仏教・慈済会』白馬社。
- 三木英(2015)『宗教と震災 阪神・淡路、東日本のそれから』森話社。
- 村島健司(2013)「台湾における震災復興と宗教：仏教慈済基金会による取り組みを事例に」稲場圭信・黒崎浩行編『震災復興と宗教』250頁～269頁、明石書店。
- 林美容・陳淑娟(2004)「九二一震災後臺灣各宗教的救援活動與因應發展」詹素娟・林美容・丁仁傑編『災難與重建：九二一震災與社會文化重建論文集』257頁～288頁、中央研究院臺灣史研究所。

『The Gist of Japan』 (2)

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 Takayuki Onoue

前回は、『The Gist of Japan: The Island, Their People and Missions』(日本の要点:その島々、人々、伝道)について、著者ピーリーと内容の概要を紹介し、日本の宗教に関する記述について言及した。今回は、その日本の宗教のなかで数ページを割いて紹介されている天理教について見ていきたい。ピーリーはまず、「天理教は、これまでに挙げた日本の偉大な宗教と同列にして紹介するに値しないと考える人もおそろくいるであろう。確かに、日本の伝統的な宗教ほどには敬意を払うに値しないし、またそれらの宗教ほどの影響力ももっていない。天理教は最近始まったばかりであり、その信者層は社会の下層階級に留まっている。」と述べている。次いで、「しかし、その信仰者たちは、今日の日本でもっとも勢いがあり、天理教は大変活発な宗教団体の1つとなっている。驚くべき速さで発展しており、特にここ最近5年間の動きは目覚ましい。政府の認可も得ており、日本の宗教界でその存在感を高めつつある。信仰者数は5百万人にのぼると述べる専門家もいるが、おそらく高く見積もりすぎであろう。」と述べ、天理教を日本の主要宗教の1つとして挙げている。この書籍が出版されたのは1897年であり、おやさが現身を隠してからちょうど10年後となる。日本全国に次々と天理教の教会が設立されていた時期でもあり、その存在が主に佐賀で宣教活動に従事していたピーリーの目にもとまっていたと考えられる。以下、主だった記述を拾いながら、その内容を見ていくことにする。

まず、「天理教は伝道宗教であり、日本のほぼ全土に非常に熱心な信徒がいる。これらの信徒たちは、宣教のため非常に熱心に講演を行っており、その努力は全体として実を結んでいる。」として、日本中で活発な布教活動が行われていることを記している。次に、おやさまについては、「創始者は農家の中山ミキという女性であり、一般的にはオミキと呼ばれる。1798年に大和の貧しい家庭に生まれた。」と紹介している。40歳までは彼女の人生において特記すべきことはなかったが、40歳の時トランス状態に入り、神道の神々のひとりクニ・トコ・タチ・ノ・ミコトが顕われ、彼女は多くの苦痛を受けることとなったとして、その時の様子を以下のように記述している。

つかの間の平静の後、ミキは再びトランス状態に陥り、数多くの神々が顕われた。その中には、神道の偉大な神々が含まれていた。これらの神々は、彼女に対して教えの内容について明らかにし、それは唯一真実の教えであり、その他のあらゆる教えに対して最終的に勝利するものであると述べた。神々はまた、彼女はこの啓示を世界に伝えるため神々が指名した道具であると伝えた。この時以来、ミキはこの啓示の宣教に身を捧げるようになった。

その後、ミキはこの教えを人々に伝えていくことになったが、「彼女は、古い宗教との対立を望まず、啓示は神道の神々によるものだとし、教えのなかに仏教のよく知られた要素も取り入れた。この方法で、彼女は人々に耳を傾けさせ、人気を得た」のであると説明している。こうして、天理教は神道や仏教の教えと類似点を多く持つとしながら、その一方でその信条は従来の宗教の教えと根本的に異なっていると述べ、その特徴について言及している。

ピーリーは1つ目の特徴として、まず次のように述べている。

第一に、天理教には非常に一神教的傾向がある。ミキ自身は多神教を受け入れていたが、人間が真に忠誠を誓うべきは太陽と月であると教えた。彼女はこれらを真の神々とみなした。しかし、この二神は常に共に働き、世界やその中にあるすべてのものは彼らの共同作業の産物であるので、彼らは実質的には一つである。彼女の没後、教えはますます一神教的傾向を強め、説教者のなかには、明白な一神教を説く者もいる。

次いでピーリーは、ミキは、神と人間との新しい関係を説いたと述べる。彼女の教えによれば、神々と人間は親子の関係にあり、まさに人間の親がわが子にするように、神々も子供である人間を見守り、愛を注いでいると記した。そして、天皇は人々の長兄であり、神々を親と仰ぎ、人間の代表として、人々を統治していると説明している。

さらに、天理教の教えの大きな特徴として病気の治癒をあげ、以下のように説明している。

病気の救済は天理教独自の教えのなかで主要な部分を成していた。医者も薬も必要ではなく、病気の治癒は信仰のみにてなされると主張する。実際に現れた素晴らしい救済が不思議な話として語られている。その多くは充分に確証があるように思われ、その救済の真実性を疑う理由はない。なぜなら、精神の力やある種の神経障害における個人的な磁力の影響はよく知られており、こういった救済は超自然的なものに言及しなくても簡単に説明する事が出来るからだ。

しかし、このように述べた後で、天理教における特徴ともいえるこの病気治癒は、現在では徐々に見られなくなってきていると結んでいる。

次に天理教における人間の魂や心に関する教えについて言及している。ミキの教えは基本的に現実世界の問題について終始し、未来についてはほとんど述べていないが、人間の魂や心のあり方について、「ミキによれば、魂は神から生じるものであり、死後は神々の元へと戻っていく。また彼女は、苦痛、病気、罪の原因は人間の心の不純性にあると教え、信仰者が神の恩寵を受けるためには、心を浄化しなければならないと説く。彼女は、心が汚れている限り、いかなる祈りや宗教的なつとめ役に立たないと繰り返し主張している。」と紹介している。

また、ピーリーは、ミキの教えとそれを実践している信徒たちが目指しているものは社会的に有意義なものであり、この宗教の活動は非常に倫理的であると述べている。しかし、そう考えられる一方で、世間的には非道徳的と見なされる部分もあると指摘している。

天理教の信仰者は、同じ下層階級の他の人々に比べて道徳的に優れていることは疑いない。しかし、この新しい宗教の特徴のなかには疑念を抱かせるところがあり、政府によって厳重に監視されている。特に、男性と女性が共に参加するとされる夜中に行われる踊りに関して、大きく道徳に反しているという罪が問われている。しかし、これらの疑いは天理教に批判的な人々が生み出したものであり、充分に証明されているわけではない。

イスラームと世界、そして日本のこれから

天理大学人文学部准教授

澤井 真 Makoto Sawai

在留外国人問題に揺れる日本

日本の在留外国人問題は、ここ数年、メディアでたびたび取り上げられてきた。移民問題の裾野は、ムスリム墓地やモスクの建設をめぐる、地域住民との軋轢から、騒音トラブルにまで広がっている。2025年7月に投票が行われた参議院選挙でも、外国人問題は選挙の争点の一つとして注目されたが、その後も、国際協力機構（JICA）の「アフリカ・ホームタウン」事業、そして10月の自由民主党の総裁選挙でも、移民問題に対する候補者の見解が注目された。今後、日本では移民にまつわるニュースは増えることはあっても、よほどのことがない限り減ることはないだろう。

クルディスタンとワラビスタン

埼玉県蕨市は埼玉県南東部に位置する東京のベッドタウンである。京浜東北線を使用すれば、都心まで乗り換えなしで行くことができる便利な場所でもある。蕨市や川口市には、現在、多くのクルド人が集住している。蕨市は「ワラビスタン」とも呼ばれている。このように呼ばれる背景に、「クルディスタン」という地域がある。クルディスタンとは、トルコ東部、イラク北部、イラン西部、シリア北部、アルメニアの国境にまたがる広大な地域を指す言葉であり、この地域では歴史的にクルド人が主として居住してきた。クルド人の大半がスンナ派のムスリムであるが、そのほかにもアレヴィー派の信仰者やキリスト教徒などが存在する。

山岳地帯に広がるクルディスタンは地政学上の要衝であるため、常に王朝の領土争いに翻弄されてきた地域であり、それゆえに緩衝地帯として自治権を与えられてきた地域でもある。第1次世界大戦の勃発中の1916年、オスマン帝国と戦うイギリス、フランス、そしてロシアは、戦後のオスマン帝国の領土分割をめぐるサイクス＝ピコ協定を締結した。オスマン帝国の敗戦後、連合国とのあいだに締結されたセーヴル条約（1920年）によって、クルド人の居住地域はクルディスタン国家として独立が一時的に承認された。

しかしながら、アタテュルク（ケマル＝パシャ）率いるトルコ共和国の国民政府が誕生し、同条約の破棄を宣言した。その後、1923年にローザンヌ条約が新たに結ばれ、クルディスタンは先に述べた各国の国境によって分断された。複数の国にまたがって暮らすクルド人の総数は、3,000万人から4,500万人とされる。クルド系は総数だけでみれば、アラブ系、トルコ系、イラン系に次ぐ民族であるが、国家をもたない最大の民族となっている。こうした背景があり、彼らは独立した国家をもつことを望んで武装化し、1970年代後半にクルディスタン労働党（PKK）を結成した。そこで、トルコ政府との衝突を繰り返し、緊張状態にある。

日本に滞在するクルド人たち

現在、日本に滞在するクルド人の多くはクルド系トルコ人である。彼らはトルコのパスポートで日本に入国し、その後、政治的・民族的迫害を理由に難民申請を行って滞在している。一方で、世界的に見て、日本は申請数に対して難民認定数が少ないことで知られている。トルコ人の難民認定申請者数については、445人（令和4年 全体の3位で総申請者数は3,772人）、2,406人（令和5年 全体の2位で総申請者数は13,823人）、1,223人（令和6年 全体の3位で総申請者数は12,373人）と、毎年上位を占

めている⁽¹⁾。一方で、たとえば令和6年に難民認定を受けた人数は190名であるが、トルコ人は誰も認定を受けなかった。こうした状況にあって、日本に入国したクルド人は難民認定申請を行うことで日本からの退去に対する時間的猶予が与えられ、仮放免などの在留資格を得て日本で滞在しているケースが多い。

2025年7月、日本に20年以上不法滞在していたトルコ系クルド人男性がトルコへ強制送還された。この男性の強制送還という措置は、同年6月に改正された入管法（出入国管理及び難民認定法）を象徴するものとなった。入管法の改正前では、難民申請中は強制送還を行うことができない送還停止効という法的な壁があった。退去強制令書が出されているにもかかわらず、帰国を拒む者を送還忌避者と言う。送還忌避者として難民申請を再度行えば、送還停止効が適用されるため、この男性は難民申請を繰り返すことで日本に滞在してきた。ところが、改正後には、3回以上の難民申請者には送還停止効はもはや適用されなくなると送還が可能となった。

このクルド人男性について言えば、仮放免の身分にありながら、滞在中に会社経営を行って多額の利益をあげており、また派手な生活を送る様子がSNSを通して拡散されていた。そのため、出入国在留管理庁が常にマークしていた人物であった。男性の強制帰国は今後の難民申請に大きな影響を与えようと考えられる。

イスラームと世界、そして日本のこれから

今日、日本では多文化共生社会やダイバーシティという言葉が踊っている。ただし、多くの人々が想定する多文化共生とは、「郷に入っては郷に従う」という状況を念頭に置いたものである。移住者たちが異なった宗教的・文化的価値をもって移住するのは当然である一方で、受け入れる側は「郷に従う」ことを暗黙裡に求めている。移住者と地元住民のあいだの軋轢は、相手への期待が裏切られた瞬間に生じているとも言える。

欧米諸国で暮らすムスリム移民について言えば、西洋的な価値観に順応し、郷に従って生きるムスリムもいれば、移住以前の宗教的・文化的な価値観を現地でも変わらずに推し進める人々もいる。基本的にはほとんど価値観を変化させることなく、イスラームはヨーロッパ社会に着実に根付いてきた。この意味で、イスラームの伝道とムスリムの移住は密接不可分であると筆者には感じられる。地元住民に違和感を引き起こさせながら、自らの生き方はほとんど変えることなく、着実に時間をかけて相手の価値観の変容を引き出していく。もちろん、移住してきた彼らの本国で地元住民が他の宗教的価値観を受け入れられるかどうかは別の問題であり、大抵はそうならないことが多いだろう。

今後、日本社会ではイスラームの存在感が増していくことは間違いない。伝道が自らの宗教的価値を伝えることであるとき、我々はどうした諸問題を通して、変わらない強固な信念をもつ人々というムスリムの宗教的価値を、間接的に教えられていると言えるかもしれない。一方で、私たちにも伝えたい信念や価値観があるとするれば、どのように行動していくべきか。イスラームから学ぶことは多い。

[註]

(1)「令和6年における難民認定者数等について」（出入国在留管理庁 <https://www.moj.go.jp/isa/content/001434935.pdf> 2025年10月7日アクセス）

日本による植民地統治の手段としての「同化」教育

山本 和行 Kazuyuki Yamamoto

台湾の文化史研究を進める陳培豊が『『同化』の同床異夢』という言葉で表現したように、植民地教育における「同化」には、立場（統治者／被統治者）・民族（日本人／漢民族／先住民）・時代（1895～1910／1910年代～20年代／1930年代～1945）によって多様な意味、あるいは多様な意図が込められていた。その基層にあったのはふたつの方向性、すなわち「民族への同化」および「文明への同化」であった。

ここでいう「民族」とはいわゆる「日本民族」への「同化」であり、「民族への同化」は総じて、統治者である日本人が志向した「同化」の方向性である。台湾統治下における教育は、「国語（日本語）教育」の実施を軸として、日本による台湾統治がはじまった1890年代から徐々に広まっていった、いわゆる「君民同祖」、「一視同仁」、さらには国語を日本人の「精神的血液」（上田万年）と捉えるイデオロギーを宣揚しながら、「民族への同化」を志向しながら進められていった。

それに対し、「文明への同化」は後藤新平による植民地政策の方向性にも象徴されるように、日本内地の経済活動を支え、利益を還元するための植民地としての役割をまっとうするのに必要な範囲での「近代化」（植民地的近代化）を進めるために、統治者側によって意識された方向性である。また同時に、被統治者となった台湾の人々による植民地統治に対する「抵抗」のなかで志向された方向性であった。それは、陳培豊が以下のように指摘するとおり、台湾の人々が「国語教育」を含めた日本による植民地政策をおおむね引き受けたことは、「近代化」＝「文明化」を受け容れ、「受容による抵抗」を展開するためであった。⁽¹⁾

台湾における差別統治の根拠を本島人の民度、文明の停滞、遅れとする統治者にとって、少なくとも理論上は、本島人の民度、文明の進歩は植民地差別統治の緩和、撤廃へと収束することになる（…）台湾人による植民地統治への抵抗は、必ずしも「同化」教育を拒否するものではなかった。むしろ「同化」教育の積極的受容が近代文明化の進展＝差別統治撤廃＝植民地体制への抵抗となる流れは必然であった。

呉叡人が指摘するように、日本による植民地統治が「同化」と「差別」をともに内包する「差別的包摂」をおこなうことで、被統治者たちは1945年の日本による植民地統治の終焉に至るまで「制度的な閾（Institutional liminality）」の状態に置かれつづけたことによって、結果として「同化」教育の積極的需要が差別統治撤廃へとつながることはなかった。しかし、台湾の人々による「受容による抵抗」は、日本による植民地統治において「首尾一貫しておこなわれていた」とされる「同化のための日本語教育」や、「同化主義」という語に含まれる「同化」に、以下のように概括される両義性が存在していたことを、まさに示している。⁽³⁾

いわゆる「同化」は、内実面において“文明への同化”、“民族への同化”を包含して両義性を持たされ、また時代や政策担当者の交替によって恣意的に平等化、同一化、また差別の正当化の役割や意味が賦与され、その内実や均衡は変動し決して一様ではなかった。つまり「同化」はその両義性に従って支配する側にとっても受容する側にとっても方便化し、かつ流動性を帯びていたのである。

したがって、植民地統治下における「国語教育」は、こうした「両義性」を帯びた「同化」を象徴するものとして、かつ、植民地社会のなかでの「差別的包摂」のありようを象徴的に示すものとして位置づけられることとなった。1922年2月に公布された「第二次台湾教育令」において、第2条「国語ヲ常用スル者ノ初等普通教育ハ小学校令ニ依ル」、および第3条「国語ヲ常用セサル者ニ初等普通教育ヲ為ス学校ハ公学校トス」と規定したことにより、それまでの初等教育における「民族別学」の原則を「国語」の「常用」へと変更したことは、植民地統治における「国語教育」の強化、および植民地社会における「国語」の社会的位置づけのさらなる向上を促したと見ることができる。⁽⁴⁾ 1922年2月に公布された「第二次朝鮮教育令」においても、台湾教育令と同様に、「国語ヲ常用スル者」／「国語ヲ常用セサル者」という表現のもとに、別学の基準を「国語」の「常用」如何によるものと定めたことは、日本による植民地教育全体の基軸が「国語教育」に置かれたことを示しており、それはそのまま、日本の植民地統治における「差別的包摂」のもと、被統治者が周縁的な立場に置かれつづけることを示唆するものでもあったといえるだろう。

1931年の満州事変と翌年の「満州国」成立に象徴的に示されるように、1930年代以降、日本は徐々に戦時体制下の社会へと変容を遂げていく。植民地統治もそうした変容と連動し、いわゆる「皇民化政策」という言葉に象徴される「民族への同化」の強化、そのあらわれのひとつとしての「国語教育」の深化が進められていくこととなった。

[註]

- (1) 陳培豊『『同化』の同床異夢—日本統治下台湾の国語教育史再考—』、新装版、三元社、2010年、297～298頁。
- (2) 呉叡人著、梅森直之・山本和行訳『フォルモサ・イデオロギー—台湾ナショナリズムの勃興1895-1945—』、みすず書房、2023年、143～144頁。
- (3) 陳培豊前掲書、299頁。
- (4) 「台湾教育令」については、春山明哲・松田康博・松金公正・川上桃子編『台湾の歴史大全—基礎から研究へのレファレンス—』、藤原書店、2025年、144～145頁、参照。

第5講:「元の理」と福祉思想

おやさと研究所元研究員

八木 三郎 Saburo Yagi

はじめに

「元の理」に関する文献の1つに、中山正善2代真柱の『こふきの研究』がある。その中に、

教祖から“こふきを作れ”とのお話を頂いて、山澤良助さんが筆を執ってお目にかけた。しかし、教祖はそれでよいとは仰せられなかった…(7頁)

“それでよい”と仰せにならなかった点が…お話全體が間違っているのか、部分的に思召に叶わなかった点があるのか、それとも不明なのであります。(10頁)

と記されている。教祖が“それでよい”と仰せにならなかったのは何故なのか。山澤良助氏の『和歌體こふき本』(明治14年本)を題材に、福祉思想の観点から検証した。

「福祉思想」の定義

ここでいう「福祉思想」とは、社会福祉の根幹にある考え方の1つである「社会的障壁の除去」をいう。人生を歩むお互い一人ひとは、さまざまな困難によって生きづらさを余儀なくされることがある。生きる上での困難は病、事故、貧困などの個人因子によるものだけではなく、社会のありようも深く関係している。その環境因子が人々の生活を安寧に導くこともあれば、逆に困難をより拡大させることもありえる。その個人と社会との関係性で生ずる障壁(負の環境因子)には、「事物」「慣行」「制度」「観念」などがある。「事物」とは、社会構造上の障壁を意味し、「慣行」は長年の因習・習慣などである。「制度」は法律・規範における障壁を言い、「観念」は人々のネガティブ思考、排他的捉え方を意味する。

今回の講座では、この社会的障壁の観点から現代社会の実態を紹介した。「事物」については、「自助」に力点が置かれる近年、「セルフサービス」が日常生活に普及することによって、自力でできない者にとって困りごとが拡大しているのである。個人因子もさることながら、環境因子が更に困難を強いる事例である。「慣行」では、「大相撲舞鶴場所」で土俵上で倒れた舞鶴市長に心臓マッサージの救命処置をしている女性看護師に対して、古来よりの因習を優先させ、「女性は土俵から降りてください」とアナウンスが流れたのである。わが国の長い歴史の中で女性に対する差別的意識、扱いが今なお存在する実態を紹介した。

人々の生きる力を社会の障壁によって押しつぶす社会のありようは等閑視してはならない。どんな環境、社会の中で生きるのかによって、困難のありよう、人生の歩みも大きく異なってくるのである。仏法見立て

山澤良助氏が執筆した『和歌體こふき本』は全部で161首のお歌でまとめられている。その中に「仏法見立て」によるお歌が登場する。(太字は筆者が強調)

130. くもよみのみことさまのかりものや
これでごりんとごたいとゆなり
132. これこそはなむあみだぶと六だいや
つなかるかみさまたいしよくてん
136. 辰巳いやくにさつちさまぶつぼふの
ふげんぼさつにだるまべんてん
137. 戌亥はつきよみの神ぶつぼふの
はちまんぼさつしよとくたいし
138. ひがしいやくもよみの神ぶうぼふの
もんじゆぼさつりうをしんのふ
139. やくしさまくすりのしゆごすいしやも
しよもつもんじちゑもごしゆご
140. ひつじさるかしくねの神ぶうぼふの
だいにちさまにほふねんさまと

141. 丑寅はたいしよくてんぼうぼふの

こくぞふぼさつみよけんさまに

142. きしぼじんはしづめさまとじゆらいと

あなたさまとハをなじこふなり

143. にしこそハをふとのべさまぶうぼふの

ふどヲみよをにこふぼふだいし

なぜ、こふき本に仏法見立てのお歌が出てくるのであろうか。

ここに登場した、「普賢菩薩」「達摩弁天」「八幡菩薩」「妙見様」「聖徳太子」「法然」「弘法大師」など、すべて仏教に関する用語である。神仏習合の意味やインド発祥の信仰も挙げられており、中には歴史上の人物も記述されている。私にはこのことが不思議に思えてならない。教祖の教えを仏法見立てで補完しているようにみえる。仏教伝来

仏教公伝は552年(欽明天皇13年)である。それ以前に伝来していた「道教」「儒教」とは大きく異なる思想である。仏教の受容に関しては、豪族同士の対立を生み、国を揺るがす大事件であった。その背景には、朝鮮半島との軋轢、頻繁に起こる天変地異、蔓延する疫病など多くの諸難に対して、為政者は苦悩し、その救済を一心に仏教にすがったのである。

仏教の教えでは、生きることすべてが苦しみであり、人間は生まれ変わり、出変わりを続ける「輪廻転生」の存在である。そして前世、現世、来世の三世にわたっての生きざまの結果が「因果応報」として、生まれ変わる世界(天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄)が決まるとしている。その苦しみから逃れるには仏にすがり、「解脱」することであると説いた。また、戒律としては「殺生」を戒めている。この罪を犯せば、死後は「無間(阿鼻)地獄」に墮ちるとしている。

また、すべての人が成仏できることを説きながらも、「変成男子」「女人五障」という言葉も存在する。女性には5つの障りがあり、「梵天王、帝釈天、魔王、転輪聖王、仏」など崇高な存在になることができず、そのため男子に生まれ変わる必要があることを説いているのである。

先述した「社会的障壁」の部分で「女性は土俵から降りてください」という言葉も、古来よりわが国に存在する女性に対する「不浄観」によるものであり、これも仏教の教えに由来するものである。女性への蔑視、差別的な捉え方が今もなお、「社会的障壁」として残っている。

まとめ

日本文化の源流を歴史的史実から鳥瞰する限り、わが国は古来に伝来した大陸文化によって国が構築され、その社会システムのなかで負の思想も形成されたといっても過言ではない。「男尊女卑」「穢れの観念」「貴賤の思想」などそれぞれの時代での「社会的障壁」を生み出している。人々の思想をコントロールし、社会を統制して国家を統治してきた。

天保9年10月26日「月日のやしろ」となられた教祖は、親神の教えを口に、筆を通してご教示くださった。それらをまとめるように、「こふきを作れ」と取次の人たちに言われたものの、出来上がった内容は当時の人たちが理解できるよう「仏法見立て」で補完したものであった。

しかし、教祖は当時の社会体制におけるさまざまな偏見を「おふでさき」などで、悉く否定されているのである。

[参考文献]

中山正善『こふきの研究』道友社、1957年。

此村庄助『因果經和讃』此村欽英堂、1911年。

竹内靖一『石門心学の経済思想:町人社会の経済と道徳』ミネルヴァ書房、1962年。

大角修訳・解説『全品現代語訳法華経』角川文庫、2018年。

第 23 回国際宗教学宗教学会 (IAHR) 世界大会で発表

堀内 みどり

標記大会が 8 月 24 日から 30 日にかけて、ポーランドのクラクフにあるヤギェウォ大学 (Jagiellonian University) で開催された。大会テーマは、「OUT OF EUROPE: Studying Religion(s) in Interconnected Worlds (ヨーロッパの外：相互に繋がる世界における宗教研究)」。開会講演は、Anna Niedźwiedz 教授が「動き、対話し、変容する。ヨーロッパ外の宗教に関する民族誌的経験と人類学：相互に繋がる世界における宗教の研究」と題して行った。また、開催中は昼食後及び夕刻に特別講演があった。

今回は IAHR の大会が初めてパリで行われて 125 年、アムステルダムで学会として創立して 75 年、ヨーロッパ宗教学会の創立 25 年となる記念の大会となり、80 カ国以上から参加があった。堀内は「東アジアにおける宗教と女性」のパネルにおいて「女性教祖：教祖を『おやさ』と呼ぶ天理教信者の信仰に関する一考察」と題して発表した。天理大学関係では、澤井真、岡田正彦、山川仁、澤井義次が発表した。

27 日に行われた大会ツアーは 3 つあり、そのうちの「黒マドンナ」教会へのツアーに参加した。有名な巡礼地でもあり、教会には多くの巡礼者が詰めかけていた。一行は英語のガイドの案内で、教会を巡った。教会の壁には治癒した人々が置いていったであろう松葉杖などや奉納された数珠などが展示されていた。



写真展「天理大学 100 年」(第 2 期)を開催

中村 滋子

おやさと研究所では、2025 年 9 月 13 日～ 28 日、写真展「天理大学 100 年」第 2 期をおやさとやかた南右第二棟にて開催、期間中延べ 253 名が来場した。写真展第 1 期 (5 月) では、天理外国語学校設立時からの変遷を、天理大学ふるさと会 (同窓会) 所蔵の写真パネルをメインに展示した。第 2 期の展示では、

これらに加え、天理大学年史編纂室が所有する画像から「仙之内キャンパスの変遷」「語劇」「大学祭一みこし」「授業」「卒業」「天理駅・商店街」のテーマに分け、説明文を加えたパネルを制作した。

また、天理医療大学との統合 (2023 年) により、天理大学に医療学部が開設された経緯から、天理医療大学の前身である天理看護学院ならびに天理医学技術学校の歩みも、天理医療大学とともに写真でふりかえるコーナーを設けた。

今年度の天理大学創立 100 周年記念事業について、各活動をポスター展示した。そして、来る教祖 140 年祭に向けてという思いから、教祖 60 年祭から教祖 130 年祭までの「教祖年祭の歌」の歌詞を紹介した。



第 380 回研究報告会 (2025 年 9 月 30 日)

「日本統治期における台北幼稚園の成立と発展」

奥野 善雅 (天理教海外部)

日本が台湾を統治していた期間、日本統治者は台湾の地に各種教育機関を開設し近代教育を推し進めた。本発表ではその中でも幼児教育に注目し、1900 年から 1944 年まで運営された台北幼稚園の歴史をまとめ、日本統治者や教育を受けた子どもやその保護者が幼稚園をどのように評価していたのかなどを論じた。

台北幼稚園に関する史料の分析を通して、幼稚園に対する評価は時代ごとで変化していたこと、更には日本統治者、在日日本人、台湾人それぞれの幼稚園に求める期待が異なることを明らかにした。そのほか、日本人の立場や性格を理解したうえで交渉していく台湾人の動向から、積極的に近代教育を受容していったのではないかと私見を述べた。

最後に、本研究の残された課題として、(1) 幼稚園の保育カリキュラムや行事などの活動記録を発掘し分析をすることで、日本統治者側が求める子どもの理想像を究明すること、(2) その理想像及び幼稚園で実際に教わった内容が子どもたちにどのような影響をもたらしたかを解明することを挙げ、本発表を締めくくった。

グローバル天理

第 26 巻 第 11 号 (通巻 311 号)

2025 年 (令和 7 年) 11 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭洋

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒 632-8510 奈良県天理市仙之内町 1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

おやさと研究所 (HP)



印刷 天理時報社

Printed in Japan